「すればいい」を述語にする文のモーダルな意味

The Modality of Sentences with “Sureba Ii” as the Predicate

宮　城　星　留
Miyagi, Seiryu

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第53号　2022年３月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.53 2022

「すればいい」を述語にする文のモーダルな意味

宮　城　星　留*

1　はじめに

現代日本語においては、様々な希求表現が存在する。特に文法形式によって〈話し手の望み〉が表されている文としては、「したい」「してほしい」を述語にする文、「するといい」「すればいい」「したらいい」を述語にする文、「しないかな」といった否定疑問文などが挙げられる。モダリティ研究において、これらの文は、希求文としては、それぞれ個別に分析されており、希求文の体系的な記述や文のモーダルな意味の体系のなかでの希求文の位置づけなどについて、深く考究した研究はいまだみられない。

筆者はこのような研究状況に鑑み、複数の希求文を体系化することを目標としている。本稿では、その体系化のための前段階として、希求文のうち、「すればいい」を述語にする文（以下、「スレバイイ文」）を取り上げ、それが表すモーダルな意味の記述を文法的側面から行うことを目的とする。具体的にはレアリティー、テンポラリティーの観点から分析を行い、スレバイイ文に〈肯定的評価〉、〈願望〉、〈否定的評価〉という3つのモーダルな意味を認める。また、記述を通して、スレバイイ文がどのような条件でモーダルな意味を実現するのか、その際、どのような統語的特徴がみられるかを明らかにする。

以下、2節でスレバイイ文に関する先行研究について簡単に述べる。その後、3節で分析方法を提示したあと、用例の観察を行い、4節で結論を述べる。

2　先行研究

スレバイイ文に関する主要な先行研究としては、奥田（1991、2000）、高梨（1995、2010）、尾方（1998）、川端（2002、2012）、高橋ほか（2005）などが挙げられる。

このうち奥田（2000）は「はなし手は課題解決のための適切な動作を評価的な判断のなかにとらえて、「すればいい」のなかにさしだす」と述べる（同：356）。また、高梨（2010）は「ばいい」の基本的意味を〈当該事態をある特定のよい結果を得るための必要十分な要件として提示する〉ものだとして、「といい」「たらいい」と同様に肯定評価類に位置づける（同：58-59）。

加えて、いくつかの先行研究はスレバイイ文が〈勧め〉、〈放任〉、〈願望〉になる場合についても指摘している。このうち高梨（2010）は〈勧め〉〈願望〉〈後悔〉〈不満〉を、当該事態の制御可能

*　岡山大学大学院社会文化科学研究科 博士前期課程2年

性[1]、実現性、行為者の人称によって基本的意味から分化した二次的意味であると述べている。この二次的意味の分化は以下のように表にまとめられる。

表１　「ばいい」の二次的意味のあり方

		①当該事態の制御可能性	
		制御可能→〈当為判断〉	制御不可能
②当該事態の実現性	未実現	③行為者の人称 聞き手→行為要求 →〈勧め〉 聞き手以外	〈願望〉
	非実現 ↓ 〈反事実〉	③行為者の人称 話し手→〈後悔〉 話し手以外→〈不満〉	〈不満〉

（高梨2010：60）

高梨（2010）は〈勧め〉や〈願望〉が実現する条件を文法的な面から整理したという点で重要な研究である。また、奥田（2000）も「動作主体が二人称であるばあいでは、動作Ｐの実行をあい手にすすめる、という意味が生じてくるようにみえる」（同：369）、「動作主体が三人称であって、はなし手のがわのはたらきかけが成立しないとすれば、その「すればいい」はoptativeとしてはたらく」（同：371-372）と述べるように、見解は部分的に一致している。

スレバイイ文の実例を観察してみると、上に挙げた先行研究の分析に当てはまる例が多く見つかる。したがって、先行研究で提示された分類はおおむね妥当なものだと思われる。実際、高梨（2010）の枠組みにもとづいて、スレバイイ文を〈勧め〉〈願望〉・・・と分類することは可能であろう。

しかし、高梨（2010）をはじめとする多くの先行研究では、スレバイイ文のモーダルな意味とテンポラリティーとの相関が見落とされたまま分析がなされているように見受けられる。3節では、スレバイイ文のモーダルな意味の分析を行ううえで、テンポラリティーを考慮することの必要性を確認する。これを踏まえて、本稿では高梨（2010）で提示されている実現性（レアリティー）のほかに、テンポラリティーを観点として加え、スレバイイ文のモーダルな意味の分析を行うこととする。

[1] 事態の制御可能性は「その事態が話し手によって制御可能なものとして捉えられるものかどうかを問題にするものである」（高梨2010：49）と規定される、話し手が事態の成立／不成立を意志的にコントロールできるか否かにかかわる文法的条件である。ただし、動作主が二人称の場合、語用論的に〈働きかけ〉の意味特徴が付与されることと関わって、動作主からした制御可能性が問題になると思われる。

3　分析

3．1　分析対象・分析の観点

本稿では筆者が手作業で文学作品から収集したスレバイイ文の用例を分析対象とする。ここでは、分析に先立って、述語の形式的特徴および意味的特徴を確認し、スレバイイ文におけるモーダルな意味の分析にとって重要である観点を示しておきたい。

スレバイイ文の述語は条件形「すれば」に形容詞「いい（よい）」が組み合わさって構成される分析的な形式である。このうち「すれば」は、(1) のような条件的なつきそい・あわせ文におけるつきそい文（従属文）の述語である。

(1) 雨がふれば、川の水はあふれる。（奥田1986：3）

本研究の扱う「すればいい」が条件的なつきそい・あわせ文の下位タイプであるとすれば、条件的なつきそい・あわせ文にみられる意味的特徴がスレバイイ文にも認められるかということが問題となる。言語学研究会・構文論グループ（1985）は「条件になる出来事が文脈、あるいははなしあいからあたえられていて、その条件のもとに必然的におこってくる出来事を、はなし手は想像なり判断なりによってたしかめる」（同：3）ものとし、そこには「≪私≫の意識のそとで進行する、客観的な世界の条件・結果の関係がさしだされる」（同：5）としている。

これらの見解にしたがえば、「すればいい」という言語形式は〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉ことを〈客観的な世界の条件･結果〉の関係にあるものとして、〈想像〉あるいは〈判断〉することを表していることになる。さらに、条件的なつきそい・あわせ文はレアリティーの点からポテンシャルな事態をとる場合と、非レアルな事態をとる場合に区別されるとされている。

(2) もう一日雨がふりつづけば、すみだ川はあふれるだろう。（ポテンシャル）
(3) もう一日雨がふりつづけば、すみだ川はあふれた。（非レアル）

（奥田1986：18）

スレバイイ文も同様に、ポテンシャルな事態を表す場合と非レアルな事態を表す場合とではモーダルな意味が異なる。このレアリティーの違いが顕著に現れるのは、述語が「すればよかった」という過去形になる場合である。「すればよかった」を述語にする文の場合、テンポラリティーは過去になるが、そこにレアリティーが関わることで、(4) のように過去のポテンシャルな事態をとる場合と (5) のように過去の事実に反する非レアルな事態をとる場合とがみられる。

(4)「そんなに都合よく、放火する目的地にさ、AだとかT、G、Cなんかの頭文字ではじまるビルがあるものか？」「意外にあるものだよ」春が首を振った。「目的地と言っても、厳密ではなかった。目的の場所の付近で、火事を起こせれば良かったんだ。(略)」(重力ピエロ　p.438)
(5)「さて。私はそろそろ失礼しますね」オーバーを着て、聡に、「瑠璃子さん、心配してたんですよ」と言う。「遅くなるんなら電話をくれればよかったのに」瑠璃子に言われ、聡は、ごめん、と、あやまった。(スイートリトルライズ　p.128)

非過去形の「すればいい」を述語にする文も過去の非レアルな事態をとる場合のあることを指摘することができる。事態の不成立を否定的に評価している点で過去形を述語にする場合と共通する。

(6)「ただいま」宏の急な帰宅に母は驚いた。「帰ってくるなら事前に言ってくれればいいのに」(トイレのピエタ　p.176)

(5)と(6)のような例では両者に意味上の違いはあまり感じられないが、次の(7)(8)は非レアルな事態を差し出しているとしても、非過去形には替えられない。このように、多くの場合において「すればよかった」と「すればいい」ではスレバイイ文のモーダルな意味が異なる。以下は、一人称動作主をとって〈後悔〉を表す例である(高梨2010)。

(7)「残念でしたね。残っていれば幽霊屋敷の一番の目玉になったのに」(略)「まあな。ただ残っていても俺には楽譜が読めないから、宝の持ち腐れだっただろう。こんなことなら小学生のとき隣の秋恵ちゃんと一緒にエレクトーン教室に通っておけばよかったよ」(螢　p.90)
(8)「――もっと、ちゃんと高校生やっとくんだったな」融は思わず呟いていた。「え？　何？」貴子が振り向く。「損した。青春しとけばよかった」(夜のピクニック　p.428)

非過去形の場合、過去形と違って、過去のポテンシャルな事態をとる例はみられない。また、過去形の場合は、テンポラリティーが過去であることから、非過去形のスレバイイ文がもつ〈勧め〉などの語用論的機能はもたない。
以上のことから、スレバイイ文のもつモーダルな意味の側面を分析するにあたっては、まずレアリティー(ポテンシャルか非レアルか)とテンポラリティーにもとづいて分類を試みる必要があると思われる。
さて、このようにスレバイイ文は条件文の側面を有する一方で、「いい」を述語内部に含むことから、スレバイイ文が形容詞を述語とする評価的な文であるという側面にも注目しなければならない。形容詞分類についての研究である樋口(2001)は、「評価」を、形容詞が表す特性のもつ意義を、

人間の欲求、利害、目的とかかわって明らかにする意識的な活動であるとしている。そのうえで、「ある物が同種の他の物との関係のなかでもつ意味あいが人間の欲求、利害、目的にかかわってくるとすれば、物は、その観点からおこなわれる、人間の側からの意味づけ（《いい／わるい》）もうけとることになる」（同：48）と述べている。

スレバイイ文の実例においても、人間の欲求、利害、目的とかかわる「いい」という評価が表されていると認められる。したがって、スレバイイ文が表す意味の解釈に際しては、事態が欲求、利害、目的に照らしてどの点で「いい」と話し手が評価しているか、考慮する必要がある。

続く3. 2ではレアリティー、テンポラリティーの観点にもとづいてスレバイイ文のモーダルな意味がどのように現れるかを概観する。

3. 2　スレバイイ文のもつモーダルな意味の大分類

3. 1で述べた通り、スレバイイ文のモーダルな意味の分析にあたってはレアリティーとテンポラリティーを考慮することが必要である。ここではまずレアリティーの観点から、スレバイイ文がポテンシャルな事態をとる場合と非レアルな事態をとる場合の2つに分け、モーダルな意味の大分類を示す。スレバイイ文はこの区別のもとで〈肯定的評価〉、〈願望〉、〈否定的評価〉という3つのモーダルな意味を実現する。

ポテンシャルな事態をとる場合：〈肯定的評価〉、〈願望〉
非レアルな事態をとる場合：〈否定的評価〉

ここに挙げた3つのモーダルな意味は、「すればいい」のもつ〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉という言語的意味から導かれる。ポテンシャルな事態をとる場合、スレバイイ文は〈肯定的評価〉あるいは〈願望〉というモーダルな意味を表す。ここで〈肯定的評価〉とするのは〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉とする話し手の〈評価〉である。〈願望〉は〈仮定された事態が成立した場合、必然的に、話し手のもとに、良い結果が生じる〉と話し手が捉えることにより生じる〈事態成立への望み〉である。

非レアルな事態を差し出すスレバイイ文は、現在や過去の時点における、現実と反する事態をとっている。あるいは、時間的位置づけのない仮定的な現実と反する事態をとっている。この場合、話し手はそのような現実を認識したのち、文内容としての事態を〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉と〈評価〉している。それと同時に、そのように評価する事態が実際に現実のなかに成立していない（しなかった）こととの間の不一致を捉えている。

話し手はそのような不一致を認識するだけでなく、多くの場合、不一致に対する否定的な評価を行っている。本稿では、この〈否定的評価〉を、非レアルな事態をとるスレバイイ文のモーダルな

意味と認める。〈否定的評価〉とは〈良い結果を生じる事態が実現していない（しなかった）ことへの否定的評価〉である。高梨（2010）における〈不満〉と近いが、高梨（2010）が文で表現される遺憾といったニュアンスであるとしているのに対し、本稿では〈否定的評価〉がレアリティーに条件づけられて実現する、話し手の立場からの現実と対象的内容との関係づけであるという点を重視し、モーダルな意味としておく。本稿では、レアリティーにしたがって、スレバイイ文がこのようなモーダルな意味をもつと主張する。

以下では、レアリティーによる区別にさらにテンポラリティーを観点として加え、統語的特徴に言及しながらスレバイイ文の分類を示す。

・テンポラリティー：時間外的（恒常的、仮定的）、レアリティー：ポテンシャル

（9）「日本企業にね、元気がなくなっちゃったのも、そういう若いのが増えたせいよ」「そうかなあ……自分の考えを主張できるって偉いと思うんだけど」「そんなもの。大事なのはね、理不尽に耐える精神力。若いうちは自分の頭でなんて考えなくていいの。おかしいと思ってもとりあえず従っときゃいいの」（わたし、定時で帰ります。　p.234）

（10）「お前が将来どんな仕事に就こうと、絶対に忘れてはいけないことがあるよ。相手が何を望んでいるのか。真剣に想像してあげることだ」「想像すんの？　べつに話を聞けばいいじゃん」（イノセント・デイズ　p.282）

このタイプのスレバイイ文は時間軸上に位置づけられていない事態を表している。具体的には恒常的な事態と仮定的な事態である。（9）は、波線部「若いうちは」が示すように、恒常的であるゆえにポテンシャルな事態を表している。（10）は、波線部「お前が将来どんな仕事に就こうと」が示すように、仮定的であるゆえにポテンシャルな事態を表している。この場合、事態の時間が抽象化しているとともに、破線部「若いの」が示すように動作主が一般人称になっている例が多くみられる。また、動作主の一般化と関わって動作客体や動作の相手が主語の位置にきている例がみられることも特徴的である（後述）。スレバイイ文は〈肯定的評価〉を表す。

・テンポラリティー：未来、レアリティー：ポテンシャル

（11）「直樹は滑りたかった？」「もちろんね。でも、一番滑りたがってたのはカナブンだよ」「そうだね。でもまたいつか滑ればいいさ。足が治ったら、挑戦すればいい」（帰宅部ボーイズ　p.333）

（12）「川崎さんがどうかしたの」ぼくはあまり気のりしない声で尋ねた。「交通事故よ。足折ったんですって。（略）あの調子だと、まだ一か月くらい通院しなきゃならないんじゃないかしら。気の毒に、右足を痛そうに引きずってたわ。膝の関節のところよ。ちゃんと治ればいいんだけどね」（きみ去りしのち　p.134）

波線部から分かる通り、(11)（12）はいずれも未来のポテンシャルな事態を描いているスレバイイ文である。したがって、時間軸上の未来に位置づけられる具体的な事態が仮定的に描かれている。また、動作主は一般化されず、一人称あるいは二人称という具体的な人物が動作主となる。(11)はスレバイイ文が制御可能な事態をとっており、〈肯定的評価〉の意味を実現している。(12）は制御不可能な事態をとっており、〈願望〉の意味を実現している。

・テンポラリティー：現在、レアリティー：非レアル（事態が現在の現実と反する）

(13)「おはよう、茄子クン。昨日はよく眠れたか」平戸は声を掛けると島原はふぁぁいと小さく頷く。「眠いなら、まだ寝てればいいのに」（螢　p.134）

・テンポラリティー：過去、レアリティー：非レアル（事態が過去の現実と反する）

(14)「ああ、じいちゃん。俺、その話知ってるわ」「知ってる？」「うん。いつか親父からまったく同じことを言われたことがあるんだよね。たしか司法試験が終わる頃だったと思う。『俺の尊敬する人が教えてくれた』とか言ってたよ。だったら最初からじいちゃんがって言えばいいのにね」（イノセント・デイズ　p.327）

(13)（14）のスレバイイ文は、波線部から、それぞれ現在あるいは過去の時点での事態を描いていることが認められる。しかし、それぞれの時点で成立していない非レアルな事態をとっているという点では共通である。スレバイイ文が非レアルな事態をとる場合、(13）のように〈否定的評価〉をモーダルな意味として表現していると認められるもののほか、(14）のようにそれがほとんど感じられないものまである。

3. 3以降はスレバイイ文を、恒常的･仮定的でポテンシャルな事態をとる場合、未来のポテンシャルな事態をとる場合、現在・過去の非レアルな事態をとる場合の3つに分け、スレバイイ文のモーダルな意味の分析を行う。

3. 3　恒常的・仮定的でポテンシャルな事態をとる場合

このタイプのスレバイイ文では、文の表す事態の時間や動作主、動作客体が抽象化し、具体的な場面から離れた事態が描かれている。したがって、この場合、文の表す事態は知覚体験によって確認が可能なものではなく、思考の一般化を通して認識されるものである。話し手は、このような事態に対して肯定的評価を行っていると考えられる。

(15)（16）（17）では文の表す事態に関して、人間の〈類〉を表す「若いの」「その人」「犯人」という一般主体が文脈から想定可能だが（波線部)、動作主が特定不可能な場合もみられる。一般主体を動作主とする事態は話し手にとって意志的なコントロールが不可能であるため、このタイプ

のスレバイイ文は常に制御不可能な事態をとる。しかし、動作主の立場からは実行可能な動作が差し出されている。したがって、話し手は動作主が意志的に実行する可能性のある事態をスレバイイ文のなかに捉えていることになる。樋口（2001）にしたがえば、スレバイイ文の事態は、そのような可能性としての事態が人間の欲求、利害、目的などに関わることで可能性が絞られたものだと考えられる[2]。

用例によっては欲求、利害、目的のうちのどのような点から肯定的であるのか読み取れるものもある（破線部参照）。たとえば、（17）のような例は欲求の存在を仮定する従属文の共起によって、事態実現が欲求の実現に対して肯定的であるということが読み取れる。しかし、そのような従属文が明示されない場合も多い。

（15）「日本企業にね、元気がなくなっちゃったのも、そういう若いのが増えたせいよ」「そうかなあ……自分の考えを主張できるって偉いと思うんだけど」「そんなもの。大事なのはね、理不尽に耐える精神力。若いうちは自分の頭でなんて考えなくていいの。おかしいと思ってもとりあえず従っときゃいいの」（＝（9））

（16）「せっかく相性まで見てもらって、結婚したらいいって言ってもらったのに。なんだか勧めてもらったのと、全然、違う道を進むことになってしまって……」「まさか、そんなこと気にしないで」私は首を横に振った。いちいちそんなことを丁寧に言いに来る人はいない。占いどおりにするかどうかは、その人の自由なのだ。気にせず自分の好きなようにすればいい。（強運の持ち主 p.166）

（17）実際、僕が知る、掟上今日子の冒険譚の中でも、幾度となく彼女は、犯人にあの手この手で、眠らされそうになっている。今日子さんの場合、口封じをしたいとき、その推理力を妨害したいときに、わざわざ殺すというようなリスクを冒す必要はないのだ――そこまでせずともなんとかして眠らせればいい。（掟上今日子の備忘録　p.61）

先行研究にも指摘があるが、スレバイイ文が問題を解決するという点で肯定的である事態を描いている場合もみられる（奥田1986、高梨1995、奥田2000）。（18）のようなものである。先行発話で

---

[2] 奥田（1999：222）によれば、「しなければならない」を述語にする文が表す意味としての《必然》は「ほかの現象のはたらきかけのもとに生じてくる、物の運動（変化や発展）において、現実性への転化の可能性がひとつにしぼられて、その可能性がかならず現実性へ移行する」ことだとされている。同論文では、これが人間の動作においては《必要》という意味になるとして考えられているが、この「しなければならない」を述語にする文が表す《必要》には《規範的な必要》と《目的達成のための必要》という2つの下位タイプを認めている。スレバイイ文が目的達成のために選ばれた一つの事態を差し出しているとすれば、《目的達成のための必要》を表す「しなければならない」を述語にする文との共通点・相違点を明らかにする必要がある。この点は今後の課題としたい。

問題が提示されているが（破線部）、それを解決する事態がスレバイイ文に描かれている。

（18）山北は疑問を呈した。「でもそれは、こうして機械を止めて初めて確認できることじゃないのかね。こんなふうにロールに巻かれてしまったら、どれが狙った女性の口座番号かわからない」（略）「止めればいいんです。（略）」（銀行狐　p.306）

次に仮定的な状況で成立する事態を描いている例について観察を行う。このタイプのスレバイイ文は、具体的な場面に成立する具体的な事態ではなく、あらゆる場面で成立する抽象的な事態を描いている。後述する未来のポテンシャルな事態をとる場合との相違点は、スレバイイ文が一回的な事態ではないために、動作主や動作客体、事態の成立する場所などが抽象化されているという点である。以下に挙げる（19）～（26）のスレバイイ文が〈肯定的評価〉を表しているという点では、先に挙げた（15）～（18）と共通する。

しかし、（19）～（23）のように、スレバイイ文が使用されている場面において、文に描かれている事態の動作主に二人称や一人称といった具体的な人物が想定されている例もみられる。このようなことは、話し手が、具体的な動作主や事態が成立するための具体的な場所が存在する具体的な場面に対して、抽象化された事態を当てはめることで生じると考えられる。

（19）「お前が将来どんな仕事に就こうと、絶対に忘れてはいけないことがあるよ。相手が何を望んでいるのか。真剣に想像してあげることだ」「想像すんの？　べつに話を聞けばいいじゃん」（＝（10））

（20）「あの、ここにちょっと腰をおろしてかまいませんか？　ナカタはいささか歩き疲れましたので」（略）「かまわないよ。というか、かまうもかまわないも、好きなところに好きなだけ座ればいい。それについちゃ誰も文句はいわないよ」（海辺のカフカ（上）　p.93）

（21）他の患者たちは皆うつむき、私たち二人を意識の外へ追い出そうと苦心していた。そういう時に漂う気まずい雰囲気の中で、どういう態度を取ったらいいか、私は十分に心得ていた。ピュタゴラスの定理のように、あるいはオイラーの公式のように、毅然としていればいいのだ。（博士の愛した数式　p.229）

（22）通話を終えた白戸は掛時計を見た。九時半に小岩へ着くようにするには、あと二〇分後にここを出ればいい。（盗まれた顔　p.67）

（23）腹の底にごつごつした石を詰め込まれたみたいだった。自分の気持ちが信じられない。想像したくないものは想像しなくていい。わかりたくないならわからないままいればいい。それなのに、一瞬のうちに想像し、わかり、さらには願ってしまった。（羊と鋼の森　p.153）

次の（24）～（26）のスレバイイ文では、動作主ではなく、動作客体あるいは動作の相手が主題の位置にきている（波線部）。3. 2で述べたように、これはスレバイイ文の表す事態がテンポラリティー、人称性の点で抽象化を受けていることによると考えられる。ここでのスレバイイ文において「は」「なんか」で標示されている名詞は抽象化を受けており、いずれも〈類〉である。このタイプのスレバイイ文は、時間的限定性の点からは〈類〉として差し出されている名詞の〈特性〉を表している。

（24）「ねえ、吾妻くん、時計！　時計見て。もうすぐ定時だよ。後ちょっとじゃん。頑張って終わらせよう。そうすれば帰れる。定時で帰れます！」「いやだ！　全身痛い。マッサージ行く。仕事なんか残業してやればいいんだ。深夜だったら、いくらでも時間あるんだから」（わたし、定時で帰ります。　p.170）
（25）スポーツ系が専門のライターになりたかった。（略）そして、だんだんと気づいていった。自分はスポーツについて詳しいつもりでいたけれど、実は俺程度の知識を持つ人間はありふれているのだ、と。それはあまりショックではなかった。知識の欠如は補えばいい。（満願　p.290）
（26）未来を占うのも簡単。明るい未来と暗い未来を、七対三の割合で話す。四月は人事異動の時期だから、新しい出会いがある。八月はたいていの人が活動的になるから、ハプニングが起きやすい。恋人ができないと嘆いている人には行動範囲を広げろって言えばいい。（強運の持ち主　p.11）

スレバイイ文によって差し出されている恒常的でポテンシャルな事態は、話し手の思考による一般化を受けた抽象的な事態である。この場合、スレバイイ文が、何らかの目的を達成するための手順・方法としての事態を表している例がみられる。このようなスレバイイ文の表す事態は、話し手によるその場での〈評価〉の対象ではなく、発話以前の時点で話し手に〈評価〉され、知識として定着している法則的な手順や方法である。

（27）「規定打席はどうやって求めたらいいの？」「試合数に3.1を掛ければいい。（略）」（博士の愛した数式　p.226）
（28）ワタナベは早速、トーカイムラの遠浅の浜で、トカゲの解体に取りかかった。トカゲを裏返し、比較的柔らかな白い腹に貝殻を突き立てる。腸を出した後、力一杯、手で皮を剝ぐ。そして身を小さく切って、海水で茹でるか、熱した石で焼けばよい。（東京島　p.235）
（29）おむつ替えにはいろいろなこつがある。まず仰向けになっている曾祖父の体を一旦横向きにし、おむつを抜き取り、新しいおむつを敷き込んで体を元に戻すが、それだとテープのついた羽根の部分の一方がまだ体の下になっている。（略）あとは尿取りパッドを宛がってテープを留めればいい。（共喰い　p.113）

このような（27）～（29）のスレバイイ文が表す事態は人間の目的に適う事態である点で、評価的意味が残っている。したがって、このようなスレバイイ文も〈肯定的評価〉を表すことでは変わりない。

3．4　未来のポテンシャルな事態をとる場合

（30）～（57）のスレバイイ文は、未来のポテンシャルな事態をとっている。これらのスレバイイ文の表す事態がポテンシャルであるというのは、波線部で示されている従属文や時間副詞等が共起していることによる。すなわち、スレバイイ文の表す事態は、話し手によって仮定的な条件のもとで未来に生じる可能性があると捉えられているのである。話し手はそのような事態を欲求や利害、問題解決などの点で、肯定的結果をもたらすと評価している。（30）～（34）は動作主が全て二人称である例。

（30）「直樹は滑りたかった？」「もちろんね。でも、一番滑りたがってたのはカナブンだよ」「そうだね。でもまたいつか滑ればいいさ。足が治ったら、挑戦すればいい」（＝（11））
（31）「自衛隊の駐屯地のなかにさ、射撃訓練場があるんだよ。そこで銃弾が拾えるんだ」（略）僕とカナブンは、その実包とやらを拾いに行くことにした。「でも、やばくないのか？」「平気だよ、見つかったら逃げればいいんだ」（帰宅部ボーイズ　p.54）
（32）「どこにします？　遠くがいいな。日帰りでいかれるいちばん遠く！」（略）「それって名古屋くらいかなあ。北なら福島とか？」しほの言い方がいじらしかったので、聡はつい、「もっといかれるさ」と言ってしまった。（略）「いこうと思えばどこにだっていかれるよ。帰れなくなったら、泊ればいい」（略）（スイートリトルライズ　p.227）
（33）「あいつに、謝るべきかな？」するとカナブンは平然とこう言った。「謝る必要なんてないよ。昨日はなんで殴るんだ、なんておれも言っちゃったけど、あいつはその前に何度もおまえにひどいことを言ったじゃないか。だから、あれでよかったんだ」（略）「（略）ただ、もしあいつが謝りに来たら、許してやればいい。それだけだ」（帰宅部ボーイズ　p.31）
（34）「産科医の使命は一つでも多くの命を取り上げることだ。粗末に扱うことではない」「女性の苦しみを取り除いてやることも立派な使命だろ」「お前がそう思うのなら、一本立ちしたときにやればいい。だが、私はそうは思わない」（イノセント・デイズ　p.44）

（35）～（37）は、小説の地の文の用例である。ここでも、スレバイイ文が未来のポテンシャルな事態をとっていることが波線部によって明示されている。動作主は語り手である一人称である。

（35）明日は必要な品々を買い揃えることになるだろう。ヘアブリーチ剤、調髪用具、サンランプ。

それに、自分の容姿を短時間で変えるための処方薬や小物類も手に入れる必要がある。まあ、出かける気になったときに出かければいい。（羊たちの沈黙（下）　p.159）

（36）とにかくやってみようと思い立ち、とりかかってすぐ、これは一生かかるテーマかもしれないことにはじめて気づいた。しかしそのときはもう引く気がしなくなっていた。一から十まで自分のつごう本位の趣味といえばいいだろうか。余暇の使い方としてこんな理想的なものはなかった。好きなときに、好きなように出かけていけばよい。（きみ去りしのち　p.192）

（37）「わかってるって」「わかってない。みんな死にものぐるいで働いているんだよ」父の言ういちいちがもっともで、反論はできなかった。でも、考えを改めようとも思わない。納得してもらえないのなら、帰国後に自力で就職先を探せばいい。（イノセント・デイズ　p.290）

（38）～（41）のように、スレバイイ文に「ではないか（じゃん、じゃない）」や「だろう（でしょ）」といった〈認識の同一化要求〉を表す形式が後接する場合がみられる。この場合には、話し手が事態成立を当然のものと捉えているという含意を伴う。事態成立が肯定的結果を生じるということを、当然のものと捉えていない相手に対して、認識を同じくするよう求めているのである。ここで挙げた例は全て二人称動作主の例である。

（38）「平気、平気。捕まってもごめんなさいで済むよ」「おれは済まないの。大学講師だぞ」「蔵になったら、うちに来ればいいじゃん」（空中ブランコ　p.160）

（39）「帰ってこの話したら、怒るだろうなー、杏奈」（略）「黙ってればいいじゃん」（夜のピクニック　p.378）

（40）「じゃあ、そうね、その能力ってさ、困ってるの？　おしまいが見えるとき、頭が痛くなるとか、普段からおしまいが見えすぎて視力が低下しそうだとか」「おしまいって目に見えるわけやないから、視力は大丈夫やで。（略）頭はいくら使っても痛くならへんわ」「差しさわりがないんだったら、生かせばいいじゃない。どんどんおしまいを見て、どんどんおしまいを報告していけばいいじゃないの」（強運の持ち主　pp.148-149）

（41）「ログインして。結衣さんが加入してる、昔のテレビドラマ見られるやつ」「あのさ、前も言ったけど、これ私がお金払ってる動画サービスだよ。ワンタンにパスワード教えたら契約違反だよ？」「固いこと言わない。一緒に見てるってことにすればいいでしょ」（わたし、定時で帰ります。　p.93）

上に挙げた未来のポテンシャルな事態をとるスレバイイ文は、いずれも制御可能な事態である。このようなスレバイイ文が二人称動作主をとり、二人称にとって肯定的結果をもたらす事態を対象的内容としてとっている場合、〈勧め〉という語用論的機能を果たす（たとえば（30）、（38）、（39））。この点は高梨（2010）ほか、多くの先行研究で述べられている通りである。

一方、次の（42）（43）はスレバイイ文が制御不可能な事態をとっている例である。これらは上に挙げたスレバイイ文と同様、〈肯定的評価〉を表していることでは共通である。しかし、ここでは〈勧め〉という語用論的機能は生じえず、〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉という話し手の〈評価〉を聞き手に伝えているに留まる。たとえば、（42）では破線部の発話によって問題が生じる可能性を述べる相手に対して、その問題を解決するという点で肯定的な事態をスレバイイ文が表している。

（42）「もともとよう子は猫が好きだったんだろ。おまえはそれに割って入んなきゃならないんだよ。頑張れよ」（略）「でも、二人が猫が好きだったら、二人で勝手に話が合って、オレ、仲間外れにされちゃうじゃない」（略）「そう思うんだったら、アキラも好きになればいい」（プレーンソング　p.69）
（43）「落ち込んでんのか？」「べつに落ち込んでねえよ」「『人生を楽しむには、だれかを好きになれ』そう言ってたのは、おまえだろ。また、だれかを好きになればいいじゃん」（帰宅部ボーイズ　p.240）

以下の（44）～（50）は未来のポテンシャルな事態をとるスレバイイ文のうち、制御不可能な事態をとるものである。本稿では、これらは（42）（43）と異なり、〈願望〉というモーダルな意味を表すと捉える。〈願望〉を表す場合の動作主に関しては（44）～（47）、（50）のような三人称の例、（48）（49）のような二人称の例がみられた。

（44）「（略）ちゃんと治ればいいんだけどね」（＝（12））
（45）「もう五月も半ばだっていうのに雪なんてなあ」柳さんが恨めしそうに空を見上げる。「こんな変な天気じゃ調子狂うだろ」ようやくふくらみはじめた桜のつぼみに雪がうっすらと積もっている。「咲いてくれればいいんだがなぁ」（羊と鋼の森　p.126）
（46）「悪い、悪い。でもまあ、平戸さんの説でも島原の説でも、殺人はもうないらしいよ」「それだったらいいんですけど。平戸さんはともかく島原クンの言葉はね、いまいちアテに出来ないというか。でも本当にこれで終わってくれればいいんですけど」（螢　p.214）
（47）しかし、これだけの量の本、一冊一冊調べていたら、本棚を見回っているだけで日が暮れてしまう……何か推理のとっかかりとなるようなものがあればいいのだが。（掟上今日子の備忘録　p.181）

スレバイイ文が〈願望〉を表す場合の統語的特徴としては、「ノダガ」「ノダケド」という文末表現の後接がみられる。これらは上で挙げた（42）（43）のようなスレバイイ文には後接することができない。また、これらはのちに3．5で挙げる（69）にも共通してみられる形式であるため、スレ

バイイ文において事態が制御不可能であることを明示しているものではないかと思われる。また、話し手にとって利益のあることを表す（45）（46）のような授受動詞の使用も〈肯定的評価〉を表す場合にはみられない特徴の一つである。

樋口（2001）の定義からすれば、〈評価〉は話し手による意識的な活動である。そのため、〈肯定的評価〉の対象となる事態は必ずしも話し手の欲求や利害、目的に関わるものに限られるわけではない。しかし、授受動詞の共起などから、〈願望〉として挙げた例は全て、実現した場合、話し手に肯定的結果が生じると捉えられるものである。このことから、スレバイイ文は、ポテンシャルで制御不可能な未来の事態をとり、かつ〈仮定された事態が成立した場合、必然的に、話し手のもとに、良い結果が生じる〉という解釈を受けた場合、〈願望〉というモーダルな意味を実現すると考えられる。

（48）、（49）も未来かつポテンシャルで制御不可能な事態をとるスレバイイ文だが、これらも〈願望〉を表していると考えられる。が、上に挙げた例とは違って、「ガ（ケド）」の後接はみられず、いずれも二人称の例である[3]。また、（50）は小説の地の文の例だが、こちらも文末表現や授受動詞の共起はみられない。したがって、〈願望〉のスレバイイ文にとって、事態が制御不可能であることと、事態実現が話し手のもとに肯定的結果を生じると解釈されることの二点が本質的であると考えられる。

（48）「あんたなんか……」わたしは、その目にすくみ上がった。「あんたなんか、死んじゃえばいいのよ！」（青のフェルマータ　p.175）

（49）「ほんとだ。おまえ、痣だらけなんだなぁ。海野……おまえ、汚ねぇなぁ」「花名島正太も、汚くなればいい！」藻屑はモップを振り上げると、花名島正太の背中を何度も何度も殴りつけた。（砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない　p.156）

（50）同じクラスになったことに気付き、彼女と思わず目があってしまった時の自己嫌悪も、今も鮮やかに蘇る。早く卒業したい。早く来年になればいい。受験シーズンに突入してしまえば、あいつの顔を見ないで済む。こんなふうに、あいつのことを考えずに済む。あいつのことを憎まずに済む。融はそう願っている自分に気付くのだ。（夜のピクニック　p.52）

---

[3] 〈願望〉を表す二人称のスレバイイ文には次のような倒置文もみられた。このような倒置構造をとるスレバイイ文は〈願望〉の表出性が前面に押し出されているものであると考えられる（八亀2008）。この例では聞き手の謝罪を遮るかたちで発話がなされていることが特徴的である。

・「ハーゲンダッツのドカ食い、パワースポット巡り、傷心旅行等々、先輩にはさんざんつきあっていただき、ご迷惑おかけしましたが、私もようやく――」「いいの、いいの、幸せになってくれれば。（略）」（わたし、定時で帰ります。　p.65）

なお、次の（51）～（54）のように、未来のポテンシャルな事態を差し出しているが、事態成立の具体的な時点が明示されている例もみられた（波線部）。スレバイイ文で表されている事態は問題解決などの点から実現が肯定的結果をもたらすものであると考えられる。また、これらの例は制御可能な事態を対象的内容として差し出している。よって、ここでのスレバイイ文は〈願望〉ではなく〈肯定的評価〉を表していると言える。

（51）「そこにいる男は、こちらで抱えていた協力者だ。これから少しばかり話をしなければならないので、捜査共助課の警部補さんには外していただきたい。ただちに武装を解除し、そこのドアから出て行けばいい」（盗まれた顔　p.348）
（52）「だからさ。ボーナスみたいなもんが出たんだって。たまにはいいもん食おうぜ」（略）「でも、ご飯炊いちゃったよ」出たな、小姑。「飯は明日の朝に食べればいい。おかずはまだなんだろ？」（ワーキング・ホリデー　p.256）
（53）「今日、幸乃が家に来てるんだった。あいつ、料理作ってるって」「マジか。じゃあ、俺は帰るよ」「いいよ、うち来いよ。あいつにもそう伝えたし」「だって、帰れなくなるじゃん」「泊ってけばいいじゃん」（イノセント・デイズ　p.209）
（54）「今からどこか行こ？」「もう夕食だから無理だ」「あんな不味いご飯じゃなくて外でもっと美味しいもの食べればいいじゃん」（トイレのピエタ　p.168）

3．5　現在・過去の非レアルな事態をとる場合

以下に挙げる（55）～（69）のスレバイイ文に差し出されている事態は、論理的には、動作主が意志的に実行することで現実に移行する可能性があると考えられる事態である。しかし、スレバイイ文に描かれている事態は、話し手が現在あるいは過去の時点に成立することを発話時点で想定しているにもかかわらず、実際には現実に成立していない。このような事態はレアリティーの点から言えば、非レアルなものとなる。用例中の波線部によって、スレバイイ文が非レアルな事態を差し出していることが明示されている。

スレバイイ文が非レアルな事態をとっている場合は〈否定的評価〉というモーダルな意味を表す。話し手は、発話時における現実が、話し手が当然のことと考えている事態（（55）～（57））や、実現してほしいと思っている事態（（58）、（59））、話し手の価値基準に適っている事態（（60）、（61））に反していることに対して、否定的に評価している。

（55）「眠いなら、まだ寝てればいいのに」（＝（13））
（56）「俺の次は大村だしな。それだけでも俺の存在価値があったということでよしとするか」（略）「いつものように盛大に誇ればいいのに。謙虚ですね。本当に平戸さんですか」（螢　p.317）

（57）「ひょっとして、甲田さんて、マゾ？　人のことはいいから自分のことを考えなさいよ」「その台詞、戸田君に返すわよ。戸田君だって、西脇君のことなんかほっといて、自分のことを考えればいいのに。（略）」（夜のピクニック　p.363）

（58）「杏奈って、感情表に出さないでしょ」「そうね」「それがすごく歯がゆい。腹が立つ。もっと正直になればいいのに」（夜のピクニック　p.379）

（59）福永の逆襲を黙って聞いていた晃太郎が、「ははっ」と笑った。「よく喋る。取引先でもそのくらい強気で喋ってくれればいいのに」（わたし、定時で帰ります。　p.314）

（60）付き合っていた当時、一度だけ感想を聞いたことがあった。その時、宏は『お前の絵は面白くないよ。もっと自由に描けばいいのに』とだけ言い、それ以上の言葉はなかった。（トイレのピエタ　p.44）

（61）「小さい頃から仲良しだったんだってさ。本人に代わって復讐心に燃えてるらしい」「それで父親探し、か。そっとしといてやればいいのに」（夜のピクニック　p.21）

用例を観察すると、述語である「すればいい」が表現する〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉という論理は、発話時において成立していないことが分かる。話し手はあらかじめ「事態Pが成立した場合、必然的に良い結果が生じる」という論理を当然性、欲求、価値基準として保有している。その論理が現実のなかに成立しないことによって、話し手は「事態が成立しないことが原因で、良い結果は生じない」と〈想像〉することになる。スレバイイ文の事態がこのような〈想像〉の対象になる場合、「すればいい」を述語にする文に〈否定的評価〉というモーダルな意味が生じると思われる。

文法的特徴としては文末表現「ノニ」の後接が挙げられる。「ノニ」はこのタイプのスレバイイ文が非レアルであることを明示するが、義務的に共起していなければならないというわけではない[4]。また、この場合の「ノニ」を「（ノダ）ガ」「（ノダ）ケド」に替えることはできない。

さらに、動作主の観点からは、スレバイイ文が非レアルな事態をとる場合、二人称あるいは三人称に限られる。一人称動作主の場合はみられない。話し手が、事態を意図的に行いながら、それを

---

[4]　現在の現実に反する事態をスレバイイ文がとる場合、次の例のように文末表現「ノニ」を伴っていない例もみられる。この場合、副詞「いいから」や「黙って」との共起がみられることから、スレバイイ文は〈否定的評価〉が聞き手に伝えられることを通して、〈働きかけ〉のニュアンスを帯びると思われる。

・「だ、大体、読むだけじゃ駄目なんですよ、今日子さん。読んだ上で、推理しなくちゃいけないんです……もう、頭回ってないでしょう？」（略）「いいからあにゃたは、黙って言われた通り、私のほっぺをつねっていればいいんでふ……口出ししにゃいでくだふぁい……」（掟上今日子の備忘録　p.282）

・「いいからやめて」「うるせぇ！　なんで俺がやめなきゃならねぇんだよ！」「ヤダ！　お願いだから言わないで」「だからなんでだって言ってんだよ！　調子こいてんじゃねぇぞ！　テメーは黙って俺たちの機嫌取ってりゃいいんだよ！」（イノセント・デイズ　p.223）

自らの価値基準や当然だと思っていることに反するものとして評価することは、一般的に言って考えられないからであろう。以下に小説の地の文の例も挙げておく。

（62）部活をやっている生徒のなかには、帰宅部を軽蔑している人間が少なくない。あいつらは楽をしているだけだと実際に口にするやつもなかにはいた。放っておいてくれればいいのに……。（帰宅部ボーイズ　p.150）
（63）フォローしているアカウントのひとつ、〈愁〉のつぶやきは今日も多い。世相を憂うものばかりだ。『過労死する人の数は増え続けている。職場を理由に自殺する人は一年に二千人以上』もうちょっと明るいことをつぶやけばいいのに。（わたし、定時で帰ります。　p.19）

また、次のように、スレバイイ文が、過去の時点で事態が成立しなかったことに対する発話時点での評価を表す例もみられた。（64）は授受動詞の使用から〈残念〉や〈遺憾〉といった〈否定的感情〉が読み取れるが、（65）からはそういった感情がほとんど読み取れない。ここでのスレバイイ文は当然の事態（「最初からじいちゃんがって言う」）と、現実との食い違いを論理的に認識しているだけのようにみえる。しかし、（65）のようなスレバイイ文も〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉という〈評価〉を前提としていることでは変わりない。また、この場合も動作主の人称は二人称と三人称に限られ、一人称動作主の場合はみられない。

（64）「帰ってくるなら事前に言ってくれればいいのに」（トイレのピエタ　p.176）（＝（6））
（65）「（略）『俺の尊敬する人が教えてくれた』とか言ってたよ。だったら最初からじいちゃんがって言えばいいのにね」（イノセント・デイズ　p.327）（＝（14））

（64）（65）の延長に（66）が位置づけられると考えられる。（66）は過去の事実に反する事態をスレバイイ文に描いている例だが、これは〈否定的評価〉を表すわけではなく、話し手が現実と事態の論理的な関係を、問題解決という評価的な観点から捉えて、述べているのみである。

（66）「それはともかく、今の話、ちょっとおかしいと思いませんか？」「え？　どこがですか？　おかしいというなら、僕は最初から全部、こんなおかしな話はないと思っていますけれど……」「ATMじゃ無理な金額で、だからといって窓口でやりとりするのが後ろめたい振り込みなら、インターネットバンキングで振り込めばいいじゃないですか」（掟上今日子の備忘録　p.132）

さらに、スレバイイ文の表す事態の時間軸上の位置づけがなく、スレバイイ文が話し手によって仮定された事態を表す例（（67）、（68））もみられた。用例中の波線部が仮定された事態であること

を明示している。だが、事態を仮定していると言っても、話し手は単に事態を仮定しているわけではない。現在の現実と反することを仮定して、その仮定に対する帰結としての事態をスレバイイ文によって差し出しているのである。

すなわち、非レアルの事態を差し出していることになるが、これらのスレバイイ文には〈否定的評価〉の意味はほとんど感じられない。スレバイイ文は、場面で提示されている仮定的な状況のなかでなされた〈仮定された事態が成立した場合、必然的に良い結果が生じる〉という話し手の評価を表しているようにみえる。破線部で示されるような目的や問題解決の点から事態成立が肯定的だとする〈評価〉である。

（67）「俺が偉ければ、そんな犯罪はすぐになくせるがな」父が自慢げに、鼻を上に向けた。「どうやって」「壁に落書きをする者は無条件で死刑。そういう法律を作ればいい。（略）」（重力ピエロ p.72）

（68）「やっぱり海だよね」「海はタダだしね」「え、お金を払うところなんてあるの」「そういう話じゃないよ」「あ、よかった」「あったって、タダのところ行きゃあいいんだから」（プレーンソング　p.217）

また、（69）のように、スレバイイ文が論理的にも制御不可能な事態をとっている場合がみられる。この場合も（67）、（68）と同様、〈否定的評価〉はほとんど感じられない。この例で話し手は仮定的な状況において、自身が肯定的に評価している事態と、仮定的な状況のもとで成立しそうな現実との食い違いを認識している。

（69）「（略）佐世保さんがあんな人でよかったよ。そうでなきゃ出入り禁止か弁償かどちらかだもんな。でも、たぶん俺たちでこの絨毯を買い換えようとしても無理だぜ。少なくとも何年かはバイト代全部、差し出さなきゃな」「バイト代で済めばいいんですけどねぇ。（略）」（螢　p.83）

4　結論

3節ではスレバイイ文のモーダルな意味について分析を行った。分析においては、「すればいい」という言語形式が条件的なつきそい・あわせ文の一種だと考えられることや高梨（2010）で指摘されていることを参考に、レアリティー、テンポラリティーの観点から分析した。分析の結果、スレバイイ文がポテンシャルな事態を描いている場合には〈肯定的評価〉、〈願望〉というモーダルな意味を表し、非レアルな事態を描いている場合には〈否定的評価〉というモーダルな意味を表すことが認められた。

さらに、テンポラリティーを考慮し、恒常的・仮定的でポテンシャルな事態をとる場合、未来の

ポテンシャルな事態をとる場合、現在・過去の非レアルな事態をとる場合に分けて分析を行った。分析の結果、恒常的･仮定的でポテンシャルな事態をとる場合は〈肯定的評価〉、未来のポテンシャルな事態をとる場合は〈肯定的評価〉あるいは〈願望〉、現在・過去の非レアルな事態をとる場合は〈否定的評価〉を表すことが分かった。

また、事態の制御可能性の点からは、〈願望〉のほかに〈肯定的評価〉の場合にも制御不可能な事態をとる場合のあること（(42)、(43)）を指摘した。〈願望〉の場合は、ポテンシャルかつ制御不可能な未来の事態をとることのほかに〈仮定された事態が成立した場合、必然的に、話し手のもとに、良い結果が生じる〉という解釈を受けることによって、モーダルな意味を実現すると述べた。

スレバイイ文が非レアルな事態をとる場合、〈否定的評価〉を表すことを指摘した。そのほか、〈否定的評価〉がほとんど感じられず、肯定的に評価している事態と現実とが食い違っていることに対する論理的な認識を表すものがみられることを指摘した。

そのほか、動作主やその他の統語的特徴についても言及した。分析の結果をまとめると、次の表2のようになる。

表2　スレバイイ文のモーダルな意味とその実現条件

<table>
<tr><th></th><th>レアリティー</th><th>テンポラリティー</th><th>事態の制御可能性</th><th>動作主の人称</th><th>統語的特徴</th></tr>
<tr><td rowspan="2">〈肯定的評価〉</td><td rowspan="3">ポテンシャル</td><td>恒常的</td><td>制御不可能</td><td>一般主体</td><td rowspan="2">・時間性、動作主、動作客体などの抽象化
・動作客体の主語への繰り上げ
・従属文や時間副詞の共起</td></tr>
<tr><td>未来</td><td>制御可能・制御不可能</td><td>一人称や二人称</td></tr>
<tr><td>〈願望〉</td><td>未来</td><td>制御不可能</td><td>二人称や三人称</td><td>・「ノダガ」「ノダケド」の後接</td></tr>
<tr><td>〈否定的評価〉</td><td>非レアル</td><td>現在・過去</td><td>制御可能</td><td>二人称・三人称</td><td>・「ノニ」の後接</td></tr>
</table>

今回の分析は、スレバイイ文の表すモーダルな意味をレアリティー、テンポラリティーといった複数の文法的条件からおおまかに特徴づけただけにとどまる。したがって、スレバイイ文のもつ〈勧め〉などの語用論的機能についてはほとんど考察を行うことができなかった。また、今回は非過去形の述語をとるものに限って分析を行ったが、非レアルな事態をとる場合の関係を探る点から「すればよかった」を述語にする文の調査を行う必要もある。そして、それらを踏まえ、希求文の体系化のために、シタライイ文、スルトイイ文など、他の評価文の調査を行わなければならない。全て今後の課題としたい。

参考文献

尾方理恵（1998）「「PバQ」～「Pすればいい」の意味の広がり--（付）突き放し用法「すれば？」について--」『千葉大学留学生センター紀要』4、千葉大学留学生センター、65-77

奥田靖雄（1986）「条件づけを表現するつきそい･あわせ文―その体系性をめぐって―」『教育国語』87、むぎ書房、2-19

奥田靖雄（1991）「動詞論」奥田靖雄著作集刊行委員会（編）『奥田靖雄著作集 3　言語学編（2)』むぎ書房、5-114

奥田靖雄（1996）「現実･可能･必然（中）―「していい」と「してもいい」―」言語学研究会編『ことばの科学』7、むぎ書房、137-173

奥田靖雄（1999）「現実・可能・必然（下）―しなければならない―」言語学研究会編『ことばの科学』9、むぎ書房、195-261

奥田靖雄（2000）「現実・可能・必然（その4）―すればいい、するといい、したらいい―」奥田靖雄著作集刊行委員会（編）『奥田靖雄著作集 3　言語学編（2)』むぎ書房、353-372

川端芳子（2002）「表現形式と表現意図の対応―シタホウガイイとスレバイイを比較して―」『新潟産業大学人文学部紀要』13、新潟産業大学附属研究所、1-16

川端芳子（2012）「「適当・提案」を表す形式―シタホウガイイとスレバイイについて―」『立教大学日本語研究』12、立教大学日本語研究会、2-12

工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房

言語学研究会・構文論グループ（1985）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(3)―その3・条件的なつきそい・あわせ文―」『教育国語』83、むぎ書房、2-37

高梨信乃（1995）「条件接続形式による評価的複合表現―スルトイイ、スレバイイ、シタライイ―」『阪大日本語研究』7、大阪大学文学部日本学科（言語系)、39-54

高梨信乃（2010）『評価のモダリティ―現代日本語における記述的研究―』くろしお出版

高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈（2005）『日本語の文法』ひつじ書房

樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」言語学研究会編『ことばの科学』10、むぎ書房、43-66

三宅知宏（2010）「「推量」と「確認要求」--“ダロウ”をめぐって」『鶴見大学紀要　第1部日本語・日本文学編』47、鶴見大学、9-55

宮崎和人（2007）「＜まちのぞみ＞と＜発動＞の間」『岡山大学文学部紀要』48、岡山大学文学部、77-89

宮崎和人（2020a）「可能表現の研究をめぐって」『国語と国文学』97-10、明治書院、3-16

宮崎和人（2020b）「第4章　モダリティ」井島正博（編著）『現代語文法概説』朝倉書店、36-54

八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』明治書院